

親に告げず兵志願六十五年前

我れ十五才教育恐し

侵略の戦争美化の教科書を

採択とう教育委員会とは

核廃絶・脱原発も加わりて

二〇一一年平和行進

若者と平和行進足指に

血豆作りつ八十一が

(さとう けんぞう・長岡市)

国民学校の記憶

佐藤守正

私は日本の敗戦を湯沢村国民学校二年生で迎えた。したがって、戦中の学校の経験はわずか一年と一学期でしかなかったわけだが、今も鮮やかに残っている記憶がいくつかある。

一つは「紀元節の式典」の話。

真冬の寒い日、みんな素足にわら草履を履いて講堂に並んでいた。壇上では校長先生が白手袋をして、恭しく教育勅語の巻き紙を掲げながら読んでいた。子どもたちは頭を下げて早く終わらないかと思いながら聞いている。垂れてくる鼻汁をすすする音があちこちから聞こえてくる。

ふと、隣に並んでいる女の子の足下に水たまりができて、それが見る間に広がっていくことに私は気付いた。大変だ、早く先生に知らせなければと声を上げたところ、男の先生がつかつかと近づいてきて、女の子の世話をしてくれるのかと思いきや、いきなり私がげんこつではり倒されたのだった。

恐れ多くも天皇陛下のお言葉を告げているさなかに、「おしっこだ」と不浄な声を上げるとは何事だというのだろう。私は驚きと恐怖で泣くことさえできなかったのだった。

もう一つは「修身」の授業の話。

教師から、「大きくなって何になりたいか」と問われて、そう答えなければ叱られると知っていた私は、

「兵隊さんになつて天皇陛下のために戦います」と答へながら震えていたのであった。

叔父の戦死の公報が来て、母や祖母たちが寢室の暗がりの隅に身を寄せ合つて、声をひそめながらも号泣していたその姿を目にした直後だっただけに、兵隊になると答えてしまった私は、大人になつて戦死することと教師に約束してしまつたと思ひ込み、ことあるごとにそれを考えては震えている子になつてしまつたのである。

それを教師にも友達にも悟られまいと虚勢を張つてゐる毎日がなんとも重苦しく、敗戦とはもう兵隊にはならなくてもいいことと分かつた時の身の軽くなるような解放感は、まさに強烈だった。吹雪の中を、素足で雪を踏むようなボロわら靴で登校するひもじく貧しい毎日だったにもかかわらず、これで安心して大人になれるという気持ちは私を支えるに十分だった。

（さとう もりまさ・湯沢町々会議員）

長岡空襲・翌日の兄の死

高橋 坦

私は、見附市の今町寄りの村で生まれました。長岡空襲の時は十歳でした。長岡の街が真っ赤に燃え上がるのを、家族はみんな田んぼまで出て見ていました。私は恐ろしくて家の縁側で眺めました。

当時、私より四つ上の兄が、工業高校の一年生に在籍していました。その兄が空襲の翌日、八月二日の朝テストでもある日だったんでしようか、ブックバンドで二・三冊教科書を担いで登校して行きました。勿論学校が焼けていることもわかっていながら、見附ですから現実を理解しないまま出かけて行つたのです。

丸焼けの工業高校で、不発弾や焼夷弾の残骸に興味をもつたグループの中に兄貴はいたようです。丁度、受け渡ししている時、そばで爆発して右の胸をえぐられるような大怪我をしたそうです。

同じ集落の一年先輩が、お昼頃に家に告げてくれま